

特集 『手話グループ・トライ』・・3つの団体がひとつの団体として活動

市民活動団体は、それぞれの目的をかねて活動しています。ときには同じ目的をもった団体が一つのイベントをすることもありますが、日頃は個別の団体の活動です。

「手話グループ・トライ」は、3つの団体が継続的に事業を行っている団体です。いわゆる連合会、連絡会ではなく、あくまでも一つの団体として活動しています。そこで、「手話グループ・トライ」がどんなきっかけで生まれたのか、どんな組織形態なのか、メリットは？ などについて、「手話グループ・トライ」代表の川里やすみさん（小平市聴力障害者協会）、早田恒子さん（手話サークル火曜会）、古川米子さん（小平手話サークル）、三澤久江さん（手話通訳）にお話をうかがいました。

◆「手話グループ・トライ」誕生のきっかけ

市内小中学校の総合学習で手話についての授業をしてほしいということで、小平市社会福祉協議会から関連の団体に声がかかったそうです。小平市聴力障害者協会、手話サークル火曜会、小平手話サークルの3つの団体です。それぞれ個別に声がかかったのですが、一つの授業を行うためには、内容の組み立て、リハーサルなどまとまった活動が必要です。そのほかにも、メンバーをどのようにそろえるのかといったことを考えると、やはり窓口は一つの方がよいということで、「トライ」をつくったとのこと。平成7年4月のことです。これで、小中学校⇒社会福祉協議会⇒トライというしっかりしたルートができました。

◆組織の組み立て

「トライ」の組織は、三輪車をイメージすると分かりやすい、と川里さんは話します。三輪車の前輪が聴覚障がい者団体、後輪の2つが手話サークル団体ということです。中心になるのはあくまでも聴覚障がい者（団体）という考え方。福祉関係の活動は、ともすれば、ボランティア団体が前に立ち、本来の主人公である当事者は「サービスの受け手」となっている場合があります。でも中心になるのは、本来は当事者なのだということを「トライ」はしっかり主張しているのです。

◆活動の内容

聴覚障がい者が活動の前面に立つ、ということから、授業の進行・司会などは聴覚障がい者自身が行います。手話サークル員はそれを通訳する立場。当事者でなければ聞けない話ができ、直接、会話もできるというわけです。きっと、授業に参加している子どもたちも、聴覚障がいのある人に積極的に話しかける機会になります。手話に親しむと同時に、聴覚障がいがあるということへの理解がいつそう進むのではないかと感じました。

◆活動の広がり

「トライ」発足のきっかけは、市内小中学校でした

が、現在では都立高校にも出向くほか、高齢者施設などで聴覚障がいのある方への対応の仕方を職員にアドバイスしたり、小平市総合防災訓練に参加、自治会・町内会の防災訓練で、聴覚障がい者への対応について学んでもらったり、市民まつりで子どもたちにゲームなどを通して手話に親しんでもらったり、たいよう福祉センター、あおぞら福祉センターなどのお祭りで活動する、など様々に広がってきているそうです。

◆今後へ向けて

順調に進んでいる「トライ」の活動ですが、悩みがないわけではありません。ひとつは若い人の参加が少ないこと。ボランティア団体のメンバーが高齢化しているのはどこも状況が同じですが、障がい当事者団体へも若い人が入ってこないという傾向があるとのこと。小平市聴力障害者協会は、川里さんたちが苦労して作り上げ、行政との交渉、ボランティア団体との協働関係を作ってきたのですが、若い聴覚障がい者の人たちにとっては、たとえば「便利なスマホがあるのは当たり前」の時代。障がいがあっても仕事もできる環境が整いつつあります。わざわざ団体に入って活動するという面倒なことをする必要はない、と考えるのも無理はないといえばその通りです。けれど、まだまだ世間に「知らせていく」必要性や、暮らしていく環境を良くすることなど続けていかなくてはならないことが多いのです。若い人たちにももっと参加してほしいと、川里さんたちは考えているとのことでした。



聞こえない・聞こえにくい方のための交流会

今回の取材の直接のきっかけは、11月25日、中央公民館で行われた「トライ」主催、『聞こえない・聞こえにくい方のための交流会』への参加でした。当日は、「トライ」メンバーのほか、「聞こえにくい方」や「小平要約筆記サークル「ほおずき」」も参加しての会でした。聴覚障がい者といっても、手話が使えない人とはかぎりません。

こういった交流会を通して今後も活動がますます広がっていくとよいと感じました。

（文責：伊藤）